

【研究ノート】

東アジア内陸乾燥地域における畜糞文化の研究動向

包 海 岩

要 旨：本論の目的は、東アジア内陸乾燥地域における家畜糞（以下、畜糞）文化に関する研究動向を整理し、その特徴を分析することにある。これまでの畜糞文化の研究動向を整理しておくことは、今後の畜糞文化を体系的に研究する上で必要不可欠な分析作業である。畜糞文化に関する日本語、中国語、モンゴル語で報告された 19 の文献について検討した結果、畜糞文化に関する研究は、散見的研究から体系的な研究へと移行していく傾向がみられた。畜糞文化研究の特徴は、畜糞の名称研究と利用研究に重点が置かれていた。また、東アジア内陸乾燥地域の中でモンゴル高原と青藏高原が主な研究対象地域となっていた。これらの文献資料のなかで畜糞利用については、モンゴル系牧畜民で合計 58 件、チベット系牧畜民で合計 22 件に及んでいた。さらに、畜糞名称については、モンゴル高原のモンゴル系牧畜民で合計 35 個、青海省アムド地域チベット牧畜民で合計 56 個が明らかにされていた。東アジア内陸乾燥地域では、牧畜が中心的な生業であり、畜糞は牧畜民の生活にとって重要な資源として利用されている。これまで牧畜研究において、見落とされてきた畜糞文化を極めて重要な文化項目として捉え直す必要がある。

キーワード：東アジア内陸乾燥地域、畜糞名称、畜糞利用、畜糞文化、研究動向

1. はじめに

家畜は、東アジア内陸の乾燥地域のみならず、湿潤地域でも利用されてきたが、その利用方法には大きな相違がみられる。牧畜地域では畜糞は燃料をはじめ、極めて多くの用途に利用されている。しかし、農耕地域、半農半牧地域では、畜糞は肥料としてのみ利用されてきた。利用方法の違いにより、畜糞に関する取扱い方や見方にも大きな相違がみられることになる。農耕地域、半農半牧地域出身の宣教師や旅行者は、乾燥地域の多様に発達した畜糞利用にまずカルチャーショックを受け、断片的な記録を残した。そして、これらの断片的な記録をもとに畜糞利用を目的とした研究に着手することになった。ごく最近になって東アジア内陸乾燥地域の畜糞文化研究が精力的に行われるようになる。一方、牧畜地域の研究者においても、畜糞利用を文化の視点、或いは牧畜形成の視点から殆ど論じられてこなかった。そうした中で、筆者は、2014 年に提出した博士論文「社会主義中国内モンゴルにおける牧畜文化—社会主義的集団牧畜から資本主義的酪農文化へ」において、牧畜の成立を畜糞文化から問うために、畜糞文化を体系的・総合的に研究しようと試みた。筆者はモンゴル高原以外の青藏高原、新疆ウイグル自治区などの乾燥地域での調査や文献収集を展開してきた。更に、2014 年以降、日本の研究者たちもインド、モンゴル国、アフリカ地域で畜糞文化に関する現地調査を実施し、畜糞文化に関する論文を発表するようになった。このように畜糞文化はようやく着目され、研究報告が活発になされるようになってきた。本稿は、東アジア内陸乾燥地域における畜糞文化の研究動向を整理し、その特徴を分析することを目的とするものである。

2. 研究方法

本稿で対象とする文献資料は、文化人類学的な視点から収集した畜糞文化に関する宣教

師や旅行者の記録、論文、エッセイ、牧畜用語辞典、著書である。但し、畜糞の文学作品における利用は除外した。文献収集法は、文献資料の参考文献を追跡して見出した文献資料とキーワード検索でかかった文献資料である。検索キーワードは「畜糞」・「畜糞利用」・「畜糞名称」・「畜糞文化」などである。抽出の基準として、1) 畜糞名称を含むもの、2) 畜糞利用方法を含むものとした。その結果、東アジア内陸乾燥地域における畜糞文化に関する日本語、中国語、モンゴル語の文献資料 19 件が抽出された。畜糞文化研究に関する文献資料の数が少ない理由は、畜糞文化の文化人類学的研究はごく最近になってから行われたためであろう。これまで牧畜研究において見落とされてきた畜糞文化を極めて重要な文化項目として捉え直すために、断片的な資料にも焦点を当てて分析を試みた。畜糞文化の研究動向を整理しておくことは、今後の畜糞文化を体系的・総合的に研究する上で必要不可欠な分析作業である。本稿で分析した文献資料について、表 1 に概要を示した。

以下、今回レビューを行った文献資料について、畜糞の利用のみを検討したものと畜糞名称や利用の両方を検討したものがある。本稿では、畜糞名称と利用を分けて分析した。

3. 畜糞利用に関する考察

3-1. モンゴル高原での畜糞利用

モンゴル高原での畜糞燃料に最も早くに言及されたものは、宣教師や旅行者の記録である。例えば、イタリアのフランシスコ会のカルピニ(1182年-1252年)が「タルタル人は牛馬の糞を燃やした火で食物を料理する」と報告している(カルピニ、ルブルク 1989: 5)。畜糞を燃料として利用しなかった人々から見たカルチャーショックであろう。これらの宣教師や探検家の残した記録は、学術的な立場から研究がおこなわれたわけでないが、後の畜糞文化研究において重要な情報源となった。

1891年に、ジョン・グレゴリー・ボークの『各国の糞尿の祭祀』(Scatologic Rites of All Nations)という、地球上のあらゆる地域での宗教、治療学、易断、魔法、媚薬などにおける、

表 1. 本稿で使用した資料

No	著者・編者	出版年	資料名	出版社
1	カルピニ、ルブルク	1989	『中央アジア・蒙古旅行記—遊牧民族の実情の記録』※1	光風社選書
2	ジョン・G・ボーク	1995	『スカトロジー大全』※2	青弓社
3	石塚 忠	1929	『牧畜と不思議の燃料』『謎の蒙古』	日蒙貿易協会
4	西川 一三	1972	『モンゴル遊牧民の暮らしの知恵』『探検と冒険』	朝日新聞社
5	梅棹 忠夫	1990	『梅棹忠夫著作集 第二巻 モンゴル研究』	中央公論社
6	吉田 順一	1982	『アルガルとホルゴル—モンゴル畜糞燃料考』『史滴』	早稲田大学
7	鯉淵 信一	1992	『騎馬民族のこころ』	日本放送出版協会
8	松井 健	1994	『分泌=排泄物の文化地理学—オードリクール再検—』 『国立歴史民俗博物館研究報告』	国立歴史民俗博物館
9	Sampilnorbu	1999	『mongyul maljil un soyul jüü』	Ch'ü mongGul un sinjilekUuqaGan tegnig mergejil Un kebel U qoriy_a, 国立民族学博物館
10	小長谷 有紀、堀田 あゆみ	2013	『梅棹忠夫のモンゴル調査スケッチ原画集』	国立民族学博物館
11	包 海岩	2014	『社会主義中国内モンゴルにおける牧畜文化—社会主義的集団牧畜から資本主義的酪農文化へ』	名古屋大学
12	包 海岩	2015	『畜フン名称体系—内モンゴル自治区シリングル盟を中心に』『沙漠研究』	沙漠学会
13	風戸 真理	2017	『モンゴルの牧畜は生産的か—家畜糞の多角的利用より』『文化人類学』	文化人類学会
14	張宗頌	2013	『西蔵的牛糞文化』『百科知識』	中国大百科全書出版社
15	普布次仁	2007	『論翻訳と文化的関係—以牛糞為例』『西蔵研究』	西蔵自治区社会科学院
16	星 泉	2016	『糞利用の達人』『チベット文学と映画製作の現在』	東京外国語大学
17	ナムタルジャ	2016	『チベット牧畜社会におけるヤクの糞の名称とその利用法について』 『日本西蔵文化研究所会刊』	日本西蔵文化研究所
18	星 泉、海老原 志穂ら	2018	『チベット牧畜文化辞典』	東京外国語大学AA言語文化研究所
19	ナムタルジャ	2018	『変わりゆく青海チベット牧畜社会—草原のフィールドワークから—』	はる書房

※1: 正確な題名は『Historia Mongalorum quos nos Tartaros appellamus』、13世紀に書かれた旅行記である。

※2: 正確な題名は『Scatologic Rites of All Nations』、1891年に出版された。

糞尿を利用した救済法・治療薬剤の使用に関する著書がアメリカのローダーミルク社から出版された。その論考は論文、記録ノート、千以上の文献に基づくものであった。この著書は、人間の排泄物の文化的水準における扱い方を中心に論じているが、畜糞利用の事例もいくつか挙げている。その内容は、畜糞を葬送儀礼、魔術、呪術、燃料、肥料、住居建築材、皮鞣し、食糧、狩猟、喫煙、媚薬、治療、神話、化粧品、通過儀礼に利用する 15 の事例に及んでいる。これらの事例は、カルピニの資料を含め、既刊資料からの引用である。『各国の糞尿の祭祀』は、畜糞の利用を学術的な立場から研究した最初の著書である。その動機について、ボークが 1881 年、ニューメキシコのズーニーインディアンが行う清めの儀式の踊りに参列した際に受けたカルチャーショックによったと記されている(ジョン・グレゴリー・ボーク 1995:10)。

1929 年に、石塚忠の『謎の蒙古』が日蒙貿易協会から出版された。この著書の第 16 節では、「牧畜と不思議の燃料」という題で、モンゴルの樹木なき地方の燃料は何処に求めるかについて記述されている。石塚は畜糞がいい燃料であり、炊事も暖房も全て畜糞によって解決されていることに驚きを表している。石塚の資料には、「燃料としての獣糞は悪臭を放ち潔癖ある日本人は聞いただけでも顔を顰めたくなるが、あにはからん牧草のみで飼育される家畜のそれは何等の悪臭もないそう」という畜糞の臭いに言及している箇所がみられる(石塚 1929:61)。また、ヒツジ糞が鍛冶用にあてられることについても記述している。

1972 年に、西川一三の「モンゴル遊牧民の暮らしの知恵」という論文が『探検と冒険③』に記載された。この論文の中で西川は石塚と同じ疑問を持って、畜糞の利用にカルチャーショックを受けた様子を記述している。例えば、日本人の畜糞に対する清潔感や認識の違いについて次のように言及している。『糞が燃料とは!!』私たちにとっては、まず不潔感が先立ち、『燃えるだろうか?』と心配になる。もちろんほやほやの糞をすぐ燃料にすることはないが、乾燥しきった大地と空気、それに強烈な直射日光が、糞を一か月足らずで乾燥させてくれる(西川 1972:305-306)。また、西川は畜糞燃料の種類と共に性質(燃えやすさ、火力、煙)にも触れている。さらに、「家畜の数とともに糞の山によって、貧富の差がつけられる」ことについても論じている(西川 1972:307)。最も、注目される点は、「蒙古では燃料が貴重であるから、王侯貴族、活仏(ラマ教の首長)などの死体は火葬にするが、一般には付近の草原に運び、鳥や獣についばませて放置する『風葬』が行われる。土葬はしない(西川 1972:302-312)と、畜糞燃料と葬送儀礼との関りについて触れたことである。西川の調査は戦前のものであるが、論文として出版されたのは約 30 年後のことである。

1982 年に、吉田順一の「アルガル¹とホルゴル²—モンゴル畜糞燃料考—」という論文が『史滴』に掲載された。ここで、吉田は、モンゴル遊牧文化の諸課題の一つとして、畜糞名称(13 個)とその燃料としての利用法を詳細に述べている(吉田 1982:64-86)。また、畜糞の採集、燃やし方、火力についても詳細に報告している。この論文は、非牧畜文化圏の研究者である吉田が牧畜民の畜糞の燃料としての利用をよく理解した上で書かれているといえる。吉田は、「畜糞に不潔感を抱くどころか、モンゴル人には畜糞はきれいなものと考えられているらしい」と牧畜民の畜糞理解を記述している(吉田 1982:67)。このように畜糞と牧畜民の精神世界の関わりを認識している点は、畜糞文化に対する不潔感を排除しようとした試みであろう。また、吉田は「モンゴル人の天幕は、細い木の骨組みの外側にフ

ェルトを巻いたものであり、火にたいする抵抗力はきわめて弱いから、火花が散らず火の子が舞い上がることのない畜糞は、確かに薪より安全である」と畜糞燃料はゲル生活に適した燃料であることを強調している。さらに、ヒツジ糞燃料を鍛冶に利用したり、税金としておさえたり、馬糞を家畜のエサとして利用する政令を発していたことについても触れている。

1990年に、『梅棹忠夫著作集 第2巻』が中央公論社から出版された。この著書に、「家畜の糞の功罪」という梅棹の記録したユニークな一節がある(梅棹 1990: 399-400)。ここで畜糞を燃料用にするか自然に肥料用にするかという畜糞利用の在り方を、牧野経営技術となんの関係もないことといわねばならないと述べている。しかし、ここで取り上げた畜糞利用の二つの体系化、つまり畜糞の燃料用と肥料用について論じていることは有意義な議論であると、筆者は考えている。つまり、梅棹は、燃料用と肥料用では畜糞利用の方法が大きく異なっている点を示したのである。

1992年に、鯉淵信一の『騎馬民族のこころ』という著作が日本放送出版協会によって出版された。この著書でも、モンゴルの畜糞名称や利用方法が述べられている。鯉淵は、畜糞の燃料以外の馬乳酒の保存、家畜小屋の建築材、虫除け、肥料、文学、戦争、家畜の保温材などの7つの利用を記録した。鯉淵は、「畜糞は遊牧民の宝ものである」と断言している。「厳寒のモンゴル高原で越冬するには畜糞燃料は欠かすことはできない、畜糞は牧畜民の冬期の命綱である。牧畜民に糞燃料があるかどうかは冬営地を選択する最低条件の一つである。また、家畜は冬に出産する。家畜の出産時に、下敷きに粉々になった乾燥畜糞を敷いて置くと保温作用がある。このように畜糞を燃料と家畜の下敷きに利用することは、牧畜生活、牧畜生産、牧畜飼養形態に大きな影響を与えている」と指摘する(鯉淵 1992: 101-106)。鯉淵は、ウマの糞の軍事的利用にも注意を払っている。これは、畜糞の軍事的利用について初めて検討したものである。さらに、畜糞を盛り込んだ三行詩を例にあげて、モンゴル文学における畜糞名称の利用を検討した。

1999年に、モンゴル人の研究者 Sampilnorbu の *mongyul maljil un soyul jüi* (モンゴル牧畜文化論) という著書が内モンゴル人民出版社から出版された。この著書は、Sampilnorbu が彼の故郷であるヘシグテン旗での実際の牧畜生活経験や新疆ウイグル自治区モンゴル族牧畜集団での現地調査をもとにまとめたものである。Sampilnorbu は「アルガルはクソではない」(畜糞と人間の排泄物は同じものではない) という論文をその著作の一節に書いている。この節では、内モンゴル地域の五畜(ウシ、ウマ、ラクダ、ヒツジ、ヤギ)の畜糞名称と畜糞利用方法が中心に論じられている。畜糞利用について特に注目すべき点は、畜糞の民間医療での諸利用方法である。Sampilnorbu は、狂犬病、消毒、古傷、止血、関節病などに畜糞が利用されてきたと述べている。残念なことは、彼の収集した民間治療薬についての資料の一部分はこの著書に書かれていないことである。彼は、医学の本と比較を行いながら書いたため、医学的な根拠のない事例は消去もしくは削除したと注釈をつけている。Sampilnorbu は畜糞名称に応じて、燃料、雪災害時の家畜間のエサ、毛皮の鞣し、占い、民間治療(狂犬病、消毒、古傷、止血、関節病、陣痛)の10の畜糞利用方法を報告した。Sampilnorbu の論考で特筆すべきは、畜糞利用を畜糞名称との関係から論じたことである。

2014年に、筆者は「社会主義中国内モンゴルにおける牧畜文化—社会主義的集団牧畜から資本主義的酪農文化へ」において、内モンゴル自治区の牧畜社会では、畜糞は燃料(調理、

暖房、家畜の去勢時の燃料)、乳製品加工、狩猟、毛皮の薫染、井戸掘り、虫除け、乳酒の保存、販売品、治療(セブス治療、湿糞治療 13 項目、乾糞治療 6 項目)、諺、謎々、詩、歌、文学、大きさの単位、子供運動遊び、火拝信仰、占い、ウマの葬儀、ラマ教寺院への奉仕品、戦争、家畜間の糞食、布類の染色の 44 項目に利用されていることを取り上げて議論した。筆者は、畜糞利用の背景にある畜糞名称体系に照らしながらその利用体系を検討した。その結果、畜糞文化はモンゴル牧畜社会の根幹を形成する一つの牧畜文化であることを主張した(包 2014 : 220)。この研究は、後のナムタルジャや風戸の畜糞文化研究に影響を与えることになった。

2017 年に、風戸真理の「モンゴルの牧畜は生業的か—家畜糞の多角的利用より」という論文が『文化人類学』に記載された。この論文は、モンゴル国の牧畜社会における畜糞の利用を事例に、生業と産業の領域がどのように併存しているのかを議論したものである(風戸 2017 : 50-72)。畜糞の利用方法については、燃料、販売品、建材(ブロック、塗り壁材)、家畜のマット、販売品、照明、肥料、燻蒸味つけ、燻蒸殺菌、保温、家畜間の治療薬、補助飼料、哺乳抑制、放牧中に投擲、燻蒸香りつけ、害虫除け、害鳥除の 18 件が議論された。結論として、モンゴルの牧畜は「生業」と「産業」の重なりの上に成り立っており、畜糞は文化に埋め込まれて「牧畜文化」を形成していると主張した。さらに、畜産物生産は基本的に産業化されたが、畜糞だけは自家消費及びローカルな流通に留まったと述べている。この議論を筆者は賛成するが、畜糞の産業化は牧畜社会に大きな変化を与える可能性が潜んでいると考えている。

3-2. 青蔵高原での畜糞利用

2007 年に、普布次仁の「翻訳と文化の関係—牛糞文化を事例に」という論文が『西藏研究』に記載された。本論文では、チベット文学翻訳における文化理解を畜糞文化の視座から検討がおこなわれた(普布次仁 2007 : 73-78)。この中で、チベット畜糞文化を理解しない限り、チベット文学の翻訳は不可能であるという議論が展開されている。しかし、畜糞文化自体の概念には、触れられてはいない。

2013 年に、張宗頤の「チベットの牛糞文化」という論文が『百科知識』(下)に記載された。この論文で、張宗頤が「牛糞文化」という言葉を用いた(張 2013 : 57-59)。この記事は、中国国内でチベットの畜糞文化が注目されるようになった一つの事例である。張は、畜糞がチベット人の暖房、調理、風習(引っ越しや結婚の祝福)、人間の糞食、喫煙、民間医療、宗教儀礼の 7 項目に利用されていることについて記述している。

2016 年に、星泉の「糞利用の達人」という論文が特集『牧畜民の暮らしと文化』に記載された。ここで、燃料糞の加工、加工のプロセス、燃料糞の利用について論じている。星研究チームは、2018 年に『チベット牧畜文化辞典』(パイロット版)を編纂し、インターネット公開を行っている。この辞典はチベットの東北部、アムド地方ツェコ県メシユル(青海省黄南蔵族自治州沢庫県麦秀)の牧畜民の言語・文化に基づいて編纂された。ここで、ヤクの糞は燃料、家畜を繋ぐ道具、テントを固定する道具、建造物、点火材の 5 項目に利用されてきたことが収録されている。

2016 年に、ナムタルジャの「チベット牧畜社会におけるヤクの糞の名称とその利用法について」という論文が『日本西藏文化研究所会刊』第 40 巻に記載された。また、2018 年

に、ナムタルジャの『変わりゆく青海チベット牧畜社会—草原のフィールドワークから—』という著書がはる書房から出版された。上述の論文と著書の中では、青海省に居住するアムド系チベット牧畜民のヤク、ウマ、ヒツジ・ヤギの畜糞名称と畜糞利用法が検討されている。ナムタルジャの論考によると、青海省アムド地域チベット系牧畜民はヤクの糞を中心に利用していることが報告されている。ヤクの糞は、燃料、建築材(囲い、壁、台、棚、肉保存用の貯蔵庫、犬の小屋)、固定道具(テントの固定、家畜繋ぎ)、儀式、交配予防、離乳、販売品の13項目に利用されてきた。この文献資料のもう一つの興味深い点は、アムド地域では、1990年代後半から畜糞の商品化が進んでいることである(ナムタルジャ 2018: 107-109)。そして、畜糞を利用した新燃料の開発が行われていることである。これは、畜糞文化の産業社会への市民権獲得運動であると筆者は認識している。

以上、モンゴル高原と青蔵高原の畜糞利用を中心に文献レビューを行った。畜糞の燃料利用について中心的に記述されているが、畜糞は燃料以外にも多角的に利用されていることがわかる。研究者たちは、畜糞が牧畜民にとって重要な燃料、民間医療、日常生活、軍事、建築、経済、風習(引っ越しや結婚の祝福)、文学、家畜管理、毛皮の薫染など様々な用途に利用してきたことに注意を払うようになっている。

4. 畜糞名称に関する考察

4-1. モンゴル高原での畜糞名称

カルピニ(1989: 5)やジョン・グレゴリー・ボーク(1995: 10)の記述には、畜糞名称は言及されていない。

西川は「モンゴル遊牧民の暮らしの知恵」(1972)において、アルガリ³はウシの乾燥糞を指すことばであり、フルチンはヒツジとヤギの糞と尿、泥、砂などの固まった層をさす言葉であるとしている(西川 1972: 302-312)。西川の論文は、後に吉田論文に大きな影響を与えることになった。

吉田(1982: 64-86)は「アルガルとホルゴル—モンゴル畜糞燃料考—」において、モンゴルの畜糞名称を詳細に検討した。日本の畜糞名称は、貧弱で1個しかないが、モンゴルの畜糞名称は複雑で豊富であると指摘した。吉田は、ボーツ、ヤルガダス、バース、アルガル、ホモール、ホルゴル、フルズン、ウトウク、ゾンガク、シャル・アルガル、ハル・アルガル、フフ・アルガル、フフ・ホモールの13個畜糞名称を取り上げ、その意味、利用方法を詳細に分析した。この研究は、畜糞名称研究において前例のないものであった。

鯉淵(1992: 101-106)も、モンゴルの畜糞名称について詳細な記述を残している。鯉淵の収集した畜糞名称は、吉田(1982: 64-86)の収集した畜糞名称にほぼ類似するが、畜糞の利用方法についての記述は異なっている。例えば、「ウマの乾燥した糞が2、3年たつと「フへ・ホモール」(青いホモール)と呼ばれる。表面が青びかりして、雨も通さない、実にいい燃料になる。雨でも平気なので兵士が戦場で使ったということで「ツェレグ・ホモール」(軍のホモール)という名前もある」と述べている(鯉淵 1992: 104)。これは、畜糞の軍事的利用にいての最初の報告である。

梅棹(1990: 582-585)は、乾燥したウシの糞をアルガルと記述している。さらに畜糞燃料用具も詳細に描かれている。この研究は戦前に調査を行ったものである。

また、小長谷・堀田（2013：118-134）では、小長谷が自ら撮影した畜糞（ウシ糞アルガルやヒツジ糞、アルガルの山）の写真をいれて説明をおこなっている。これは1944年頃の梅棹忠夫のモンゴル調査スケッチについて現代の畜糞利用状況を補ったものといえる。

Sampilnorbu（1999：187-214）は、五畜の糞名称について言及している。排泄後まもない糞はみな「パーツ」と呼ばれるとしている。乾燥したウシの糞は「アルガル」、ウマの糞は「ホモール」、ヒツジ・ヤギ・ラクダの糞は「ホルゴル」と呼ばれると記述している。それ以外に、ウシのアルガルをさらに下位カテゴリまでの詳細な分類名称についても言及している。アルガルには「ハラ・アルガル」（黒いアルガル）、「シラ・アルガル」（黄色いアルガル）、「チャガン・アルガル」（白いアルガル）、シバガソ（粘土代わりに利用したウシの糞）という異なった名称が付与されていることにSampilnorbuは言及した。

2015年に『砂漠研究』に筆者の「畜フン名称体系—内モンゴル自治区シリング盟を中心に」と題した多角的な畜糞利用に関する事例研究が記載された。これは、2014年12月に総合地球環境学研究所で沙漠誌分科会研究会／南アジアの生業研究会 第四回研究会「世界の半乾燥地における家畜糞利用」が開催され、後に発表内容を『砂漠研究』に特集記事としてまとめたものである。これは日本で初めて、乾燥地・半乾燥地域の畜糞文化を体系的に理解しようとした試みである。ここでは、内モンゴルの事例を基に、「畜糞には、30の名称があり、家畜種、季節、家畜の成熟段階、凍結の有無、乾湿状態、粉状態によってその名称が異なる」とし、畜糞名称体系を明らかにした。五畜の畜糞名称は五畜共通と五畜種固有の名称に分けられ、五畜共通の糞名称が9個、種固有の名称が21個であることを明らかにした。

4-2. 青蔵高原での畜糞名称

星（2016：25-28）は、アムド系牧畜民の畜糞（ヤク糞）の名称について、フチャ（ヤクの糞）、リマ（ヒツジの糞）、フトウル（ウマの糞）、オンワ（燃料ように乾燥させたもの）を取り上げている。さらに、2018年に星を代表とする研究メンバーにより『チベット牧畜文化辞典』が編纂され、アムド地域チベット牧畜民の畜糞名称が数多く収録されている。その名称は51個に及ぶ。各畜糞名称のもつ意味と解釈文を付けて公表している。

ナムタルジャ（2018：99-109）では、ヤク、ヒツジ・ヤギ、ウマの糞名称を季節、家畜の成熟段階、放牧前後、乾燥、湿潤、凍結、加工、色、模様、利用用途、状態によって分類した。ここでは青海省チベット牧畜民の持つ畜糞名称が56個収録された。これは、アムド地域チベット牧畜民の畜糞名称を体系的に扱った最初の論考である。

以上、畜糞名称について検討を行った。畜糞名称に関して、東アジア内陸乾燥地域のモンゴル高原と青蔵高原での名称は多く存在する。現時点で、青蔵高原のアムド系チベット牧畜民の持つ畜糞名称が比較的によく、合計56個も確認されている。モンゴル高原のモンゴル系牧畜民の持つ畜糞名称は合計35個が報告されている。このような複雑な畜糞名称があることは、畜糞の多角的な利用があることを示している。畜糞文化の全体像をあきらかにするために、畜糞の名称体系の分析は欠かせない。畜糞の名称体系に合わせてその利用の仕方を明らかにすることも不可欠である。

表 2. オードリクール説による家畜化のプロセス

地域	動物・動物の分泌＝排泄物	家畜化のプロセス	人間・人間の分泌＝排泄物
東南アジア・東アジア の湿潤地帯	イヌ、ブタ	→ 引き寄せ	人間の排泄物(糞・尿)
ユーラシアと北米 の北部地域	トナカイ	→ 引き寄せ	人間の排泄物(尿)
中近東・西南アジア の乾燥地帯	ヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマ、 ラクダ、ヤクの分泌＝排泄物	← 引き寄せ	人間

(松井 1994 : 173-175 をもとに作成)

5. 畜糞文化と家畜化起源論

1994 年に、松井健が『国立歴史民俗博物館研究報告 第 61 集』に、「分泌＝排泄物の文化地理学—オードリクール再検」という興味深い論文を執筆している。ここで松井は、オードリクールの分泌＝排泄物の家畜化の過程における役割、つまり、東南アジア湿潤モンスーン地帯で家畜化されたとみられるイヌやブタにおいては、これらの家畜の祖先野生種が、食糧として人間の排泄物に引き寄せられたことが、家畜化の重大な契機となったと指摘している。トナカイの家畜化においても、人間の尿が重要な役割を担うとしている。反対に、人間が家畜となる動物の分泌＝排泄物のひとつである乳に引き寄せられることが、家畜化の重大な契機となったというのである(松井 1994 : 171-185)。これは、松井のオードリクール諸説の解説である(表 2)。

松井論考では、人間が家畜の排泄物である糞に引き寄せられることについては議論されていない。筆者は、人間が乳に引き寄せられたことは、牧畜化の問題であり、決して家畜化の問題ではないと認識している。平田(2013 : 438)は、家畜馴化と牧畜化とは異なる議論であるとして次のように指摘している。「家畜化の起源論と牧畜の起源論とは異なる。家畜の起源論は、野生動物がいつ家畜化されたかを論じることに焦点が当てられる。従って、農耕民が定住しながら動物を数頭飼養していても、その飼養形態や生業は重要ではなく、野生動物か家畜かの議論が問題となる。牧畜の起源論では、家畜の飼養形態や生業が問題となってくる。農耕民が定住しながら動物を数頭飼養していても、それは牧畜とは言わない」。筆者はこの学説の視点から、オードリクールの乳と糞の上位カテゴリとしての分泌＝排泄物の扱いには、共感する部分もある。それは、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマ、ラクダなどの家畜の排泄物＝糞こそが家畜化の重要な要因であったかもしれないと考えているからである。樹木資源の少ない乾燥地域で暮らす人々は野生動物の糞を燃料として利用し、その需要が増えることによってウシの野生種が家畜化された可能性もある。そのため、分泌＝排泄物である乳と糞を別々の枠組みで検討する必要があると筆者は認識している。

6. まとめ

本稿では、東アジア内陸乾燥地域における畜糞文化の研究動向を整理し、その特徴を分析した。筆者の文献調査で得られた畜糞文化に関する日本語、中国語、モンゴル語で報告された 19 の文献を対象に検討した。文献資料を分析した結果、畜糞文化に関する研究は、散見的な研究から体系的な研究へと移行していく傾向がみられた。また、畜糞文化研究の特徴は、畜糞の利用研究と名称研究に重点が置かれていることが示唆された(表 3)。

表 3. 畜糞の名称と利用に関する研究

地域	No	著者・編者	取り上げた畜糞名称	取り上げた畜糞利用
世界	1	ジョン・G・ボーク(1995)	無	葬式の儀礼、魔術、呪術、燃料、肥料、住居建築材、皮鞋し、食糧、狩猟、喫煙、娯楽、治療、神話、化粧品、通過儀礼(計: 15)
	2	松井 健(1994)	無	家畜化の起源論(計: 1)
モンゴル高原	3	カルビニ、ルブルク(1989)	無	燃料(計: 1)
	4	石塚 忠(1929)	無	燃料、狩猟、鍛冶(計: 3)
	5	西川 一三(1972)	アルガリ、フルテン(計: 2)	燃料、鍛冶(計: 2)
	6	梅棹 忠夫(1990)	アルガル(計: 1)	燃料、肥料(計: 2)
	7	吉田 順一(1982)	ボーツ、ヤルガダス、バース、アルガル、ホモール、ホルゴル、フルズン、ウトウク、ゾンガク、シャル・アルガル、ハル・アルガル、フフ・アルガル、フフ・ホモール(計: 13)	燃料、鍛冶、家畜のエサ、税金(計: 4)
	8	鯉淵 信一(1992)	パーソ、アルガル、シャラ・アルガル、ハラ・アルガル、フフ・アルガル、ホモール、フフ・ホモール、ツェレグ・ホモール、ホルゴル、フルズン、ゾンガク、ウトウク(計: 12)	燃料、馬乳酒の保存、建築材、保温材、虫よけ、肥料、文学、戦争(計: 7)
	9	Sampinorbu(1999)	バース、ヤルガダス、アルガル、ホモール、ホルゴル、フルズン、フルドス、、ハラ・アルガル、シャラ・アルガル、チャガン・アルガル、シバガス、シャラ・ホモール、ハラ・ホモール(計: 13)	燃料、家畜間のエサ、毛皮鞋し、占い、治療(狂犬病、消毒、古傷、止血、関節痛、陣痛)(計: 10)
	10	小長谷 有紀、堀田 あゆみ(2013)	バース、アルガリ、ホモール、フルテン、テメーネイ・ホルゴル(計: 5)	燃料、販売品(計: 2)
	11	包 海岩(2014, 2015)	バース、チャガ、ゾンガク、ハラ・ゾンガク、シラ・ゾンガク、ホモグ、フヘ・ホモグ、ウトウク、セブス、アルガル、ハラ・アルガル、サリソソ・アルガル、シラ・アルガル、チャガン・アルガル、フヘ・アルガル、ウジル・アルガル、ウムグ・アルガル、シバース、フルドス、ホモール、ハラ・ホモール、フヘ・ホモール、ホルゴル、フルズン、フヘ・フルズン、ダグ、シゲグ(計: 27)	燃料(調理、暖房、家畜の去勢時の燃料)、乳製品加工、狩猟、毛皮の薫染、井戸掘り、虫除け、乳酒の保存、販売品、治療(セブス治療、湿糞治療13項目、乾糞治療6項目)、諺、謎々、詩、歌、文学、大きさの単位、子供運動遊び、火拝信仰、占い、ウマの葬儀、ラマ教寺院への奉仕品、戦争、家畜間の糞食、布類の染色(計: 44)
	12	風戸 真理(2017)	ボーツ、バース、ホルゴル、アルガル、ホモール、フルズン(計: 6)	燃料、販売品、建材(ブロック、塗り壁材)、家畜のマット、販売品、照明、肥料、燻蒸味つけ、燻蒸殺菌、保温、家畜間の治療薬、補助飼料、哺乳抑制、放牧中に投擲、燻蒸香りつけ、害虫除け、害鳥除け(計: 18)
	青蔵高原	13	普布次仁(2007)	無
14		張宗顯(2013)	ジュウ(計: 1)	暖房、調理、風習、人間の糞食、喫煙、民間医療、宗教儀礼(計: 6)
15		星 泉(2016)	フチャ、リマ、フトウル、オンワ(計: 4)	燃料(計: 1)
16		星 泉、海老原 志穂ら(2018)	skya ong, kho leb, kho shog, khyag bug, dgun ong, gro lci, sngo lci, sngo ong, lci skam, lci khang, lci gyog, lci sga, lci sgong, lci bsodus, lci ba, lci btsur, lci ra, lci rug, lci rlon, lci leb, lci bsogs, rnyang chol, rnyang ba, rta rtug, beu lci, beu rug, dmar su, gtsab rug, btsur rug, tshad bu, o rtug, ril ma, ril lud, rwa khyag, lud, lud spungs, lud rul, lhas ong, ong skam, ong ba, ong rug, ong rul, ong rlon, ong lud, ong su(計: 51)	燃料、家畜を繋ぐ道具、テントを固定する道具、建造物、点火材(計: 5)
17		ナムタルジャ(2018)	ブッチェ、オンワ、オンラオン、オンカム、オンス、オンル、オンソン、フチ、フチデ、フチジョク、フチロン、ジョフチ、フチカム、キヤオン、ンゴフチ、ンゴオン、トンオン、グンオン、タンサ、ナクルク、ストウク、オルトウク、ウィルク、ウィフチ、ツァブ、ニャンワ、フツォ、ニャンチュ、フチコル、フチレフ、オンコル、オンレフ、フチゴン、フチルク、リュ、オンリウ、リリュ、リュソン、リュル、タシェ、リマ、リソン、トウリ、トウチウ(計: 44)	燃料、建築材(囲い、壁、台、棚、肉保存用の貯蔵庫、犬の小屋)、固定道具(テントの固定、家畜繋ぎ)、儀式、交配予防、離乳、販売品(計: 13)

文献資料のなかで畜糞利用についての報告は、モンゴル系牧畜民では合計 58 件、チベット系牧畜民では合計 22 件に及んでいた。モンゴル高原では、畜糞は燃料(調理、暖房、鍛冶、家畜の去勢時の燃料)、民間治療(セブス治療、湿糞治療 15 項目、乾糞治療 6 項目)、人間と家畜の建築材(ブロック、塗り壁材)、狩猟、毛皮の薫染、井戸掘り、虫除け、乳酒の保存、販売品、諺、謎々、詩、歌、文学、大きさの単位、子供運動遊び、火拝信仰、占い、ウマの葬儀、ラマ教寺院への奉仕品、戦争物質、家畜間の糞食、布類の染色、畜のマット、照明、燻蒸味つけ、燻蒸殺菌、家畜間の治療薬、哺乳抑制、放牧中に投擲、燻蒸香

りつけ、害鳥除け、税金代替品、貧富の象徴物に利用される。青藏高原では、畜糞は燃料（暖房、調理）、建築材（囲い、壁、台、棚、肉保存用の貯蔵庫、犬の小屋）、固定道具（テントの固定、家畜繋ぎ）、交配予防、家畜の離乳、販売品、点火材、諺、裸麦酒の保存、保温材、風習（引っ越しや結婚の祝福）、人間の糞食、喫煙、民間医療、宗教儀礼に利用されている。

報告された畜糞名称については、モンゴル高原のモンゴル系牧畜民では合計 35 個、青海省アムド地域チベット牧畜民では合計 56 個が研究者たちの調査によって明らかになった。今後、調査件数を増やすと、畜糞名称とその畜糞利用方法がさらに増加すると考えられる。

東アジア内陸乾燥地域では、牧畜が中心的な生業である。畜糞は牧畜民の生活にとって重要な資源として利用されてきた。これらの地域では、畜糞名称体系と利用体系は複雑に発達していた。それは、畜糞文化は牧畜社会の根幹を形成する極めて重要な文化項目の一つであることを意味している。今後の研究の方向性として、畜糞文化の視点から家畜化起源論と牧畜生業形成論を構築することが可能ではないかと筆者は考えている。また、畜糞文化研究は文化人類学、特に牧畜研究において一層重要な研究領域になっていくものと考えられる。

畜糞の産業化は牧畜社会に大きな変化を与える可能性があるが、これについてはいずれまた何らかのかたちでまとめるつもりでいる。

謝辞

本研究は、中国社科基金一般項目「丝绸之路沿线干旱区畜糞文化比较研究」（課題番号：16BMZ052、2016年～2019年度、代表 包海岩）に基づく研究成果の一部である。

注

- 1 アルガルとは、乾燥したウシの糞をさすモンゴル語である。
- 2 ホルゴルとは、乾燥したヒツジ・ヤギの糞をさすモンゴル語である。
- 3 畜糞名称についてのカタカナ表記は文献資料の表記に従う。

引用文献

〈日本語〉

石塚 忠

1929 「牧畜と不思議の燃料」『謎の蒙古』日蒙貿易協会、東京。

梅棹 忠夫

1990 『梅棹忠夫著作集 第二巻 モンゴル研究』中央公論社、東京。

鯉淵 信一

1992 『騎馬民族のこころ』日本放送出版協会、東京。

風戸 真理

2017 「モンゴルの牧畜は生産的か一家畜糞の多角的利用より」『文化人類学』82(1): 50-72.

カルピニ、ルブルク

1989 護雅夫(訳)『中央アジア・蒙古旅行記—遊牧民族の実情の記録』光風社選書、東京。

小長谷 有紀、堀田 あゆみ

2013 『梅棹忠夫のモンゴル調査スケッチ原画集』国立民族学博物館、吹田市。

ジョン G.ボーク

1995 岩田真紀(訳)『スカトロロジー大全』青弓社、東京。

ナムタルジャ

2016 「チベット牧畜社会におけるヤクの糞の名称とその利用法について」『日本西藏文化研究所

- 会刊』40(3):1-6.
- 2018 『変わりゆく青海チベット牧畜社会—草原のフィールドワークから—』はる書房、東京。
西川 一三
- 1972 「モンゴル遊牧民の暮らしの知恵」朝日新聞社編『探検と冒険』3: 302-312。
平田 昌弘
- 2013 『ユーラシア乳文化論』岩波書店、東京。
包 海岩
- 2014 「社会主義中国内モンゴルにおける牧畜文化—社会主義的集団牧畜から資本主義的酪農文化へ」平成26年度名古屋大学大学院文学研究科・学位(課程博士)申請論文。
- 2015 「畜フン名称体系—内モンゴル自治区シリングル盟を中心に」『沙漠研究』25(2): 33-41。
星 泉
- 2016 「糞利用の達人」『チベット文学と映画製作の現在』3: 25-28。
星 泉、海老原 志穂ら
- 2018 『チベット牧畜文化辞典』(パイロット版)東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京。
- 松井 健
- 1994 「分泌=排泄物の文化地理学—オドリクール再検」『国立歴史民俗博物館研究報告』61: 171-185。
吉田 順一
- 1982 「アルガルとホルゴル—モンゴル畜糞燃料考」『史滴』3: 64-86。
〈モンゴル語〉
- Sampilnorbu
- 1999 *mongyul maljil un soyul jüi*, Obür mongyul un arad un keblel ün qoriy_a, kükehote.
- 〈中国語〉
- 普布次仁。
- 2007 「论翻译与文化的关系—以牛粪为例」『西藏研究』4: 73-78。
張宗頤。
- 2013 「西藏的牛糞文化」『百科知識』(下): 57-59。

(ばお・はいやん／中国・内蒙古科技大学文法学院)